

第5回学ぶ喜び・ESD連続公開講座概要報告

奈良教育大学 中澤静男

- ◇開催日時 2019年2月10日(日) 15時~17時
- ◇会場 次世代教員養成センター1号館
- ◇参加者数 22名
- ◇内容

「グローバル・シティズンシップ教育とESD
ーGCEDとESDの関係性とシナジーー」
講師：東京大学海洋アライアンス海洋教育
促進研究センター 主幹研究員 及川 幸彦 氏



1. GCEDとESDの関係は

ESD = GCED あるいは ESD ≠ GCED

GCEDとは教育がいかんして世界をより平和的、包括的で安全な、持続可能なものにするか、そのために必要な知識、スキル、価値、態度を育成していくかを包含する理論的枠組み

2012年国連事務象徴が開始したGEFI (Global Education First Initiative) の3つの優先分野の一つ

現在進行中のポスト2015開発・教育アジェンダ策定に向けた議論では、教育の質を向上させるものとしてESDと併記されてターゲットに明記されている

目標：ESDの目標と重なる部分が多い

学習方法・能力も重なる部分が多い

2. SDGsとGCED 4.7にも明記されている

「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シティズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。」

3. GCEDとESDの関係性について

GAPレビューフォーラム in オタワ

ESDおよびGCEDについての好事例や経験の共有、教授法及び実践について

→ 国によってとらえ方が違う

- ・日本ユネスコ国内委員会

○教育の中核がESD 持続可能性の山頂がESD アプローチの仕方は多様だが

ESDは17の目標達成のカギである

国際理解教育の発展系がGCED

- ・韓国ユネスコ国内委員会

GCEDは17のゴールすべてを達成する

ESDは環境教育の発展系

ESDはメイドインジャパン。GCEDはハン・ギムン(国連事務総長)発・韓国発

- ・ユネスコの捉え方

ESDは環境教育の発展系

GCEDは国際理解教育の発展系　それで両論併記

国によって違っていかまわらない

4. GCEDの限界と有用性

- ・ 気候変動や貧困、災害など持続可能性に関わる喫緊の課題に対して貢献できるのか？
- ・ 理念や価値的な教育だけで、具体的な社会行動化が促されるのか
- ・ 地域の課題に向き合い、当事者意識を持たせることができるのか

5. 重要性

- ・ 素養としてはグローバル・シティズンシップは重要
- ・ 変革者の育成にはグローバル・シティズンシップ教育のアプローチが必要
- ・ 参政権が18歳に引き下げられる中で市民教育は重要（投票率の低下）
市民としての権利と義務

6. 日本の捉え方

ESD > GCED

国際理解教育とGCEDの整理が必要

7. ESDにおけるGCEDの実践

◇地球探索型環境教育の推進：海外との協働による地球的視野の育成

日米両地域のローカルなテーマの教材化　地域・文化による違いと人間としての共通性

学びの共有（テレビ会議）による地球的視野の育成

異文化を理解しながらコミュニケーション能力を育成

グローバルな存在としての自分の理解

※最近ではローカルに閉じられている傾向が強い

8. まとめ

- ・ GCEDは〇〇教育の一つ
- ・ ESDはfor 方向性・目的の教育
内容は規定しない
→ 教育のレベルが違う
ESDの傘の中にGCED



◇全体協議：グローバル・シティズンシップ教育とは

米田

- ・2014年あたりから日本のESDが変わりつつあると感じている。韓国と日本のギャップを感じる。1990年頃まで、日本は国連が提起する教育に関心がなかった。日本教育に足りないのはシティズンシップだ。韓国は国際的な状況を捉えて進めようとしている。ESDで大切なのは地域だが、世界への発信が弱い。そこが課題だ。
- ・グローバル化が進んでいった。多様性をどうつないでいくかで始まったのがシティズンシップ教育だ。ユネスコの捉え方
 - ①教育の平等
 - ②質の高い教育
 - ③地球市民の育成

中澤

政治共同体が税金を使って共同体を支える市民を育てるのがシティズンシップ教育。グローバルの場合、どこが資金を提供することになるのか、進捗に責任を持つことになるのかが不明だ。

田淵

国民をどう作るかが教育だった。国にこだわっている限り、地球諮問は育たない。国際理解教育は、国を相対化する視点を育てることが重視された。国を相対化する視点としてグローバルになっていった。

◇グループディスカッション

- ・ESDの実践に環境教育が多いのは事実。
- ・GCEDは理念の教育で理想論に聞こえる。
- ・国による多様性が出てくるのは仕方がない。
- ・韓国の実践や捉え方を調べる必要がある。
- ・シティズンシップ教育の現場での活かし方。子どもの個性を認める教育に深めていけばいいのではないか。
- ・ESDは黒船だ。みなが同じ方向になびいていくのが日本。子どもサイドに立って、多様な考え方ができる、多様なルーツをもつ人に共感できる、競争的な国の在り方を批判的に客観視できる人を育てることが重要。
- ・海外の人と関わるが増えている。グローバル教育は重要だ。SGHでは、総合と各教科が分離していた。
- ・シティズンシップの中にも国際理解があるのに、グローバルが入ってきて混乱している。
- ・ローカルでいいのではないのか。

及川先生

- ・韓国とは国での違いがある。歴史的背景が影響している。韓国では留学が当たり前。母親と子どもが留学。父親は年に1回海を越えて会いに来る（ガンパパ）。韓国は資源がない。学歴社会。国内に仕事が少ないので海外で活躍するという傾向がある。彼らにとって生きる場所はグローバル。その素養を育てるためにグローバル・シティズンシップを提唱している。

- ・日本ではグローバルに活躍している人は女性が多い。女性が活躍できる場が国内に少ないのが影響しているのかもしれない。
- ・韓国のユネスコスクールは地域との連携がない。逆にいうとそれが日本のE S Dの特徴。
- ・それぞれの国で重要視している教育がある。
- ・ローカルは重要だが、つながりを考えるならローカルで閉じていることはできない。つながっているという意識を持つことが重要。そのツールにSDG sを使える。
- ・SGHの統括している行政官がE S Dを知らないのが原因。縦割り行政。やっとかわってきた。
- ・PBL プロジェクトベースラーニングを文科省が持ち出している。

加藤学長

- ・SGHも答えの出ない問いに取り組むことで悩んでいる。いいきっかけになっている。
- ・インチョン宣言：E S DとGCESを併記

長友先生

- ・現在の関係性はどうなっているのか。ユネスコの文書ではアンドでつないでいる。

米田先生

・日本のE S Dを確立することが重要だ。日本ユネスコスクールの実践で少ないのが人権だ。1992年フィリピンでの会議、「平和・人権・民主主義のための教育」を打ち出した。1997年にドローレレポート共生や市民がでた。これがシティズンシップ教育の源流だ。なぜ、人権や差別に対する認識が低いのか。教育の4本柱を基盤にしていく。人権の問題はGCEDを考えていくにあたり、重要になっていく。誰も置き去りにしない、はGCEDに近い。

ユネスコ憲章の基盤が人権だった。平和だけが独り歩きした。

及川先生

人権や不平等などはGCEDが強いところだ。

平和な社会の捉え方。SDG sのすべてが達成された状況だ。矮小化すべきでない。

両方をつなぐのが「命の尊重」

社会に「適応する人材」を育成する

社会を「変革する人材」を育成するのがE S D。

理念だけでなく行動化を促進していくことが重要。

